

5 仕上げ



14 目と輪郭線を描く。表情が感じられなかった武者に命が宿る様は、まさに画竜点睛。



15 最後に「一溪」の銘を入れ、染色作業は全て終了。

6 仕立てる



16 布の四方を縫製。ケタや伸子針で張っていた布は、端が波打ってしまう。縫い終えた布は丁寧に始末される。長年縫製を担う方の成せるわざ。



17 アイロンをかける。さおで上げる品に関しては、最後に金具を縫いつけて完成。

ご協力いただいたのは…

吉川染物店

香南市香我美町岸本 56
電話：0887-54-2528



大型のフラフ以外にも要望に合わせて、家紋入りのフラフやタペストリーを販売されています。

絵金蔵の庭でフラフあげます！

期間 2021年5月1日(土) - 5月15日(土)

ミニ企画「フラフができるまで」に合せて金太郎のフラフを期間限定であげます。青空にはためくフラフを絵金蔵をご覧ください。※天候により揚げない場合がございます。

3

イベント情報



よもやま話に花が咲く。えきんぐらがお届けする小ネタ袋。

蔵通信 番外編 2 2021.4

発行：絵金蔵運営委員会 0887-57-7117
協力：吉川染物店

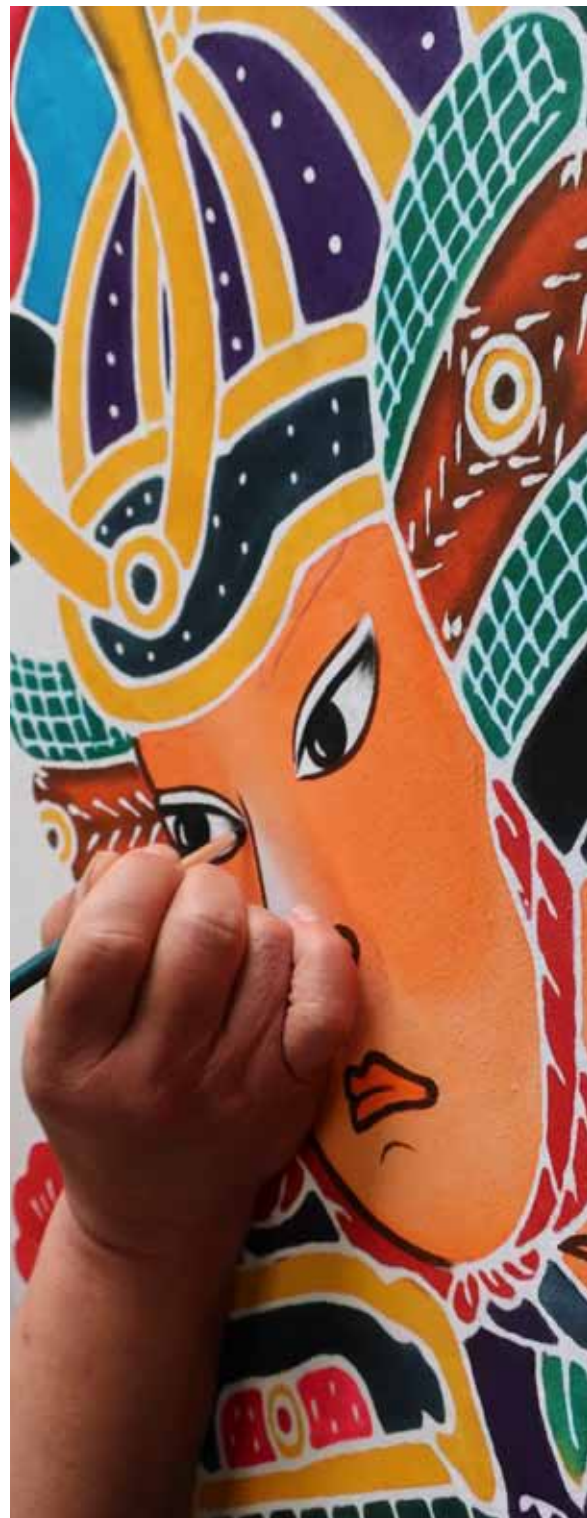
The process of making a FURAHU

フラフができるまで

高知では、明治時代以降、端午の節句の祝いに「フラフ」をあげます。「フラフ」とは、大きいもので縦3メートル・横5メートル、あるいはそれ以上もある大旗で、大漁旗から着想したとされ、この独特な名前は、オランダ語の呼び名と言われています。

絵金の弟子の吉川金太郎氏の子孫でもある「吉川染物店」の吉川毅氏の協力を得て、ミニフラフの制作過程をまとめました。

土佐で受け継がれてきたフラフ。「フラフってなんだ?」「見たことはあるけれど…」そんな皆様へ、細やかな技のひかるフラフの魅力をお伝えします。



1 下描き



① 見本を布の下に敷き、唐紅（チャコペンのような役割）で下描きする。



② 下描きした布にケタの針をひっかけていく。布の両側にひっかけたケタをハンモックのように張る。伸子針を用いてしっかりのばす。



こめのり
③ 「米糊（ぬかともち粉と塩などを合せたもの）」を、柿渋を塗った筒に入れる。伸子針を用いてしっかりのばす。

2 染色の準備



④ 下描きに合せて「筒描き（米糊で輪郭線を描く）」する。後で染色する際、染料の防波堤の役割となる。



⑤ 裏返し、水を噴霧する。裏からタワシで優しくこすり、米糊をしっかりと定着させる。



⑥ 米糊の定着具合をライトを当てて確認する。染料の染み出しを防ぐため慎重に確認する。



⑦ 顔部分に染色を補助する「助剤（写真では白い液体）」を適宜塗る。

3 染色



⑧ 顔を染色する。「筒描き」が途切れていると、染料が染み出してしまうので注意。この武者の場合、鼻先はあえて塗らない。



微妙な濃淡で、顔を立体的に表現する。



⑨ 必要に応じて濃淡をつけ、全体を染色する。ほろ写真では母衣を、途中で助剤も塗りながら、あえてにじむように染色している。

4 洗い落とす



⑩ 米糊を洗い落とす前に、色止め液をムラなく塗る。



⑪ ケタから外し、水にしばらく浸けて米糊をふやかす。



⑫ 流水とタワシで表裏の糊を落とす。昔は川でさらして洗っていた。



⑬ 再度ケタにひっかけて干す。 つづく▶